

< 洞爺湖サミットに向けた意見 >  
世界と価値観を共有し、地球規模課題に向けて  
先進国として責任あるコミットメントを示す

## 参考資料

### 【内容】

(PAGE)

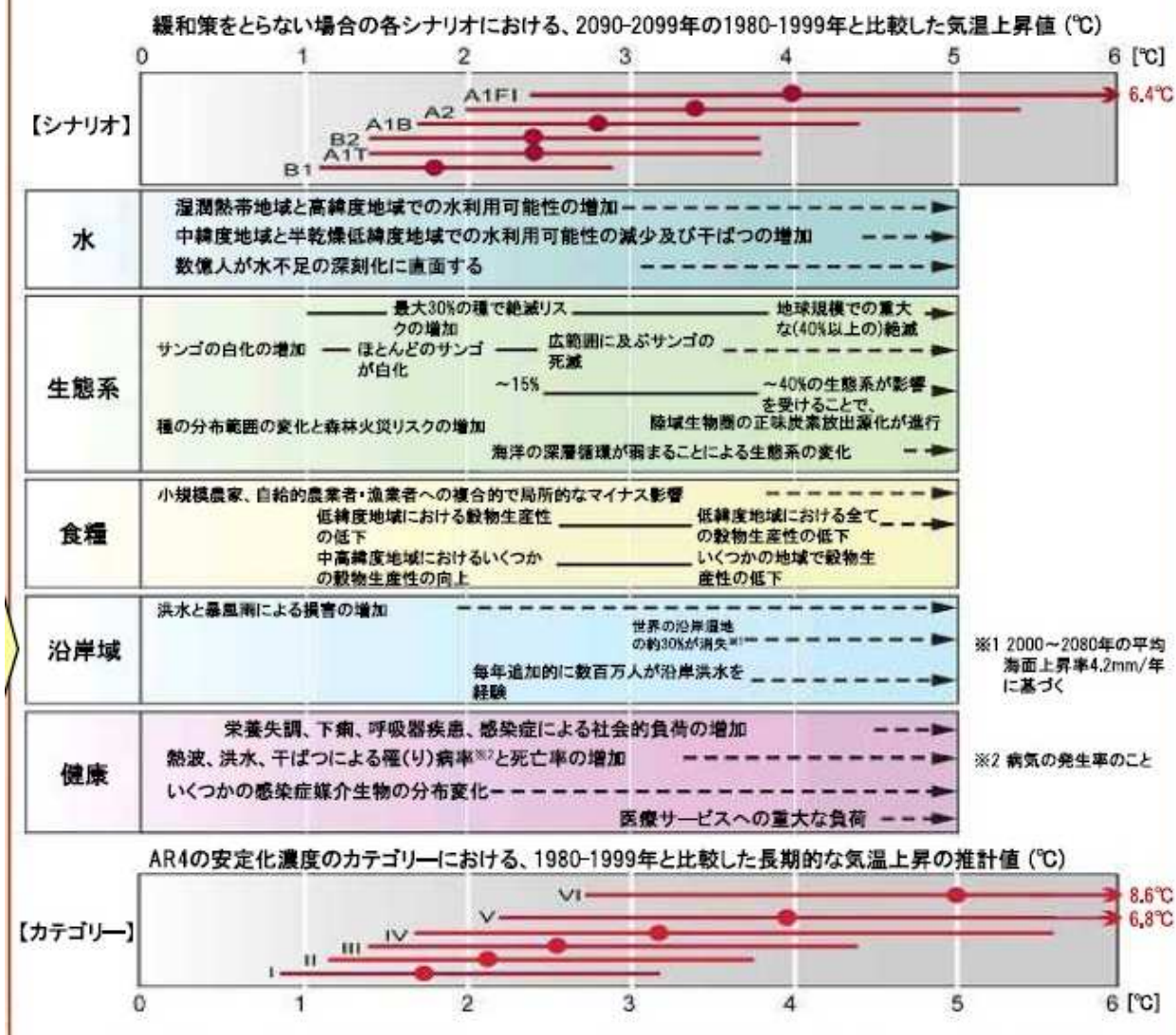
|                                                                   |    |
|-------------------------------------------------------------------|----|
| • 気温上昇による主な影響                                                     | 2  |
| • 温室効果ガス排出量の現状                                                    | 3  |
| • 世界の排出量2050年半減の意味 -                                              | 4  |
| • 世界の排出量2050年半減の意味 -                                              | 5  |
| • 世界の排出量2050年半減の意味 -                                              | 6  |
| • さまざまな政策手段とその特徴に関する主な意見・評価                                       | 7  |
| • 各国の温室効果ガス排出量削減目標の動向                                             | 8  |
| • 「クールアース推進構想」(1月26日、ダボス会議)の概要                                    | 9  |
| • TICAD(Tokyo International Conference on African Development)の概要 | 10 |
| • ミレニアム開発目標(MDGs)の概要                                              | 11 |

2008年4月22日

# 気温上昇による主な影響

## IPCC第4次評価報告書

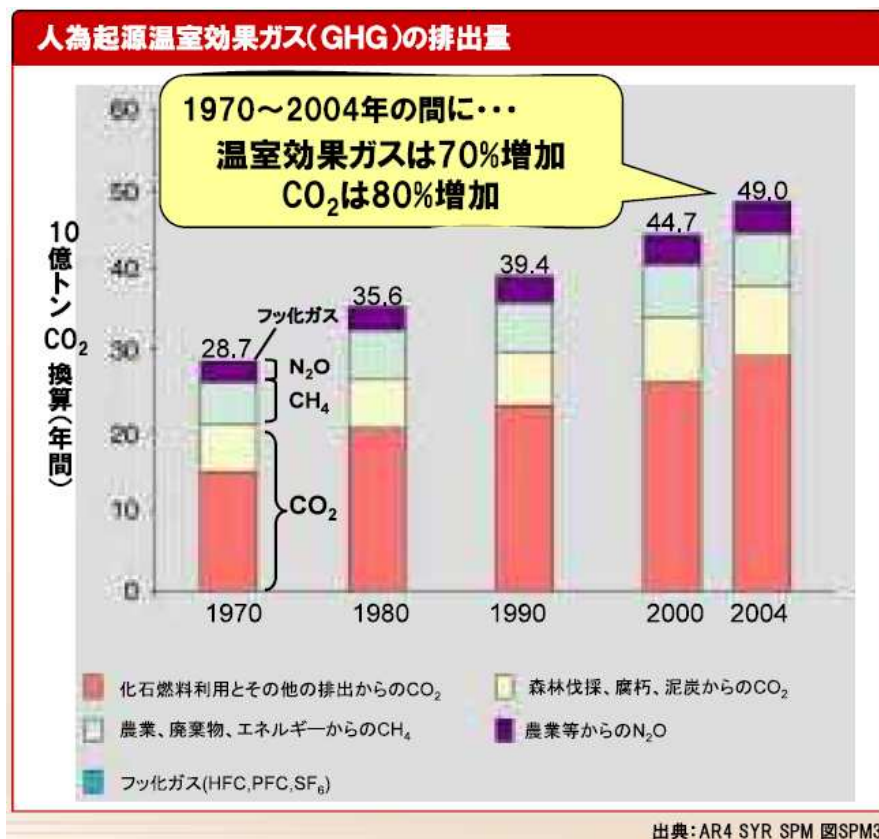
### 世界平均気温の温暖化予測に応じた影響例



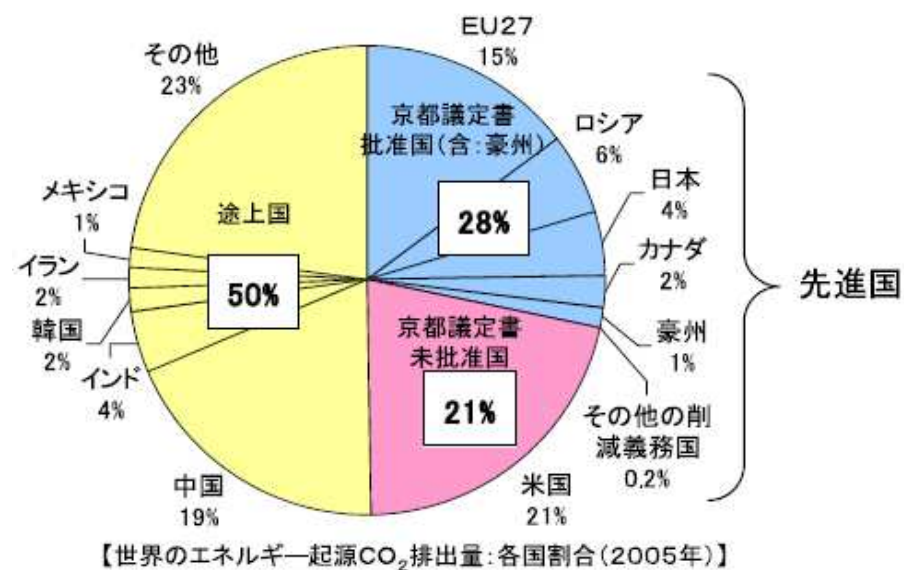
出典: AR4 SYR SPM 図SPM7及び図SPM6

出所: 環境省資料

# 温室効果ガス排出量の現状

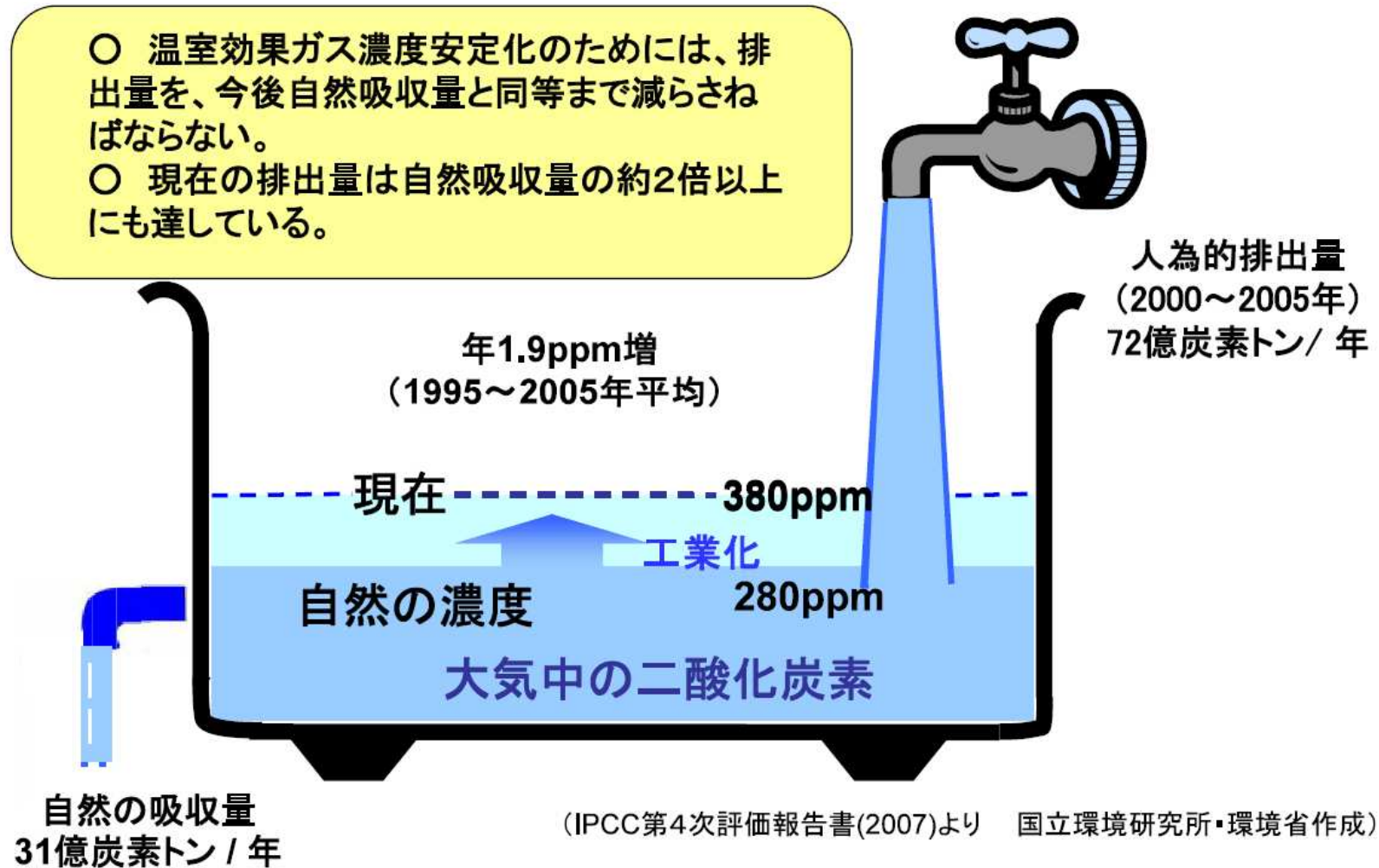


出所: 環境省資料



出所: 外務省資料

# 世界の排出量2050年半減の意味 -



炭素換算での排出量10 億t は、二酸化炭素換算36.7 億t に相当(経済同友会事務局注釈)

# 世界の排出量2050年半減の意味 -

## IPCC第4次評価報告書における安定化シナリオ

| カテゴリー | 放射強制力            | 二酸化炭素濃度 | 温室効果ガス濃度<br>(二酸化炭素換算) | 産業革命からの気温上昇 | 二酸化炭素排出がピークを迎える年 | 2050年における二酸化炭素排出量<br>(2000年比) | 研究されたシナリオの数 |
|-------|------------------|---------|-----------------------|-------------|------------------|-------------------------------|-------------|
|       | W/m <sup>2</sup> | ppm     | ppm                   | °C          | Year             | percent                       |             |
| I     | 2.5-3.0          | 350-400 | 445- 490              | 2.0-2.4     | 2000-2015        | -85 to -50                    | 6           |
| II    | 3.0-3.5          | 400-440 | 490- 535              | 2.4-2.8     | 2000-2020        | -60 to -30                    | 18          |
| III   | 3.5-4.0          | 440-485 | 535- 590              | 2.8-3.2     | 2010-2030        | -30 to +5                     | 21          |
| IV    | 4.0-5.0          | 485-570 | 590- 710              | 3.2-4.0     | 2020-2060        | +10 to +60                    | 118         |
| V     | 5.0-6.0          | 570-660 | 710- 855              | 4.0-4.9     | 2050-2080        | +25 to +85                    | 9           |
| VI    | 6.0-7.5          | 660-790 | 855-1130              | 4.9-6.1     | 2060-2090        | +90 to+140                    | 5           |

出所:環境省資料

- 長期的な温室効果ガス濃度安定化を達成するには、世界の温室効果ガス排出量がどこかでピークを迎え、その後減少していかなければならない。今後20～30年間の緩和努力によって、長期的な気温上昇量と、それに対応する気候変動の影響の大きさがほぼ決定される。
- 2050年における二酸化炭素排出量を2000年比で半減する場合、IPCC第4次評価報告書の安定化シナリオでは、カテゴリーⅠ～Ⅲに相当。
- カテゴリーⅠ～Ⅲとは、温室効果ガス濃度445～535ppm、産業革命からの気温上昇2.0-2.8を意味。2020年までのピークアウトを要する。

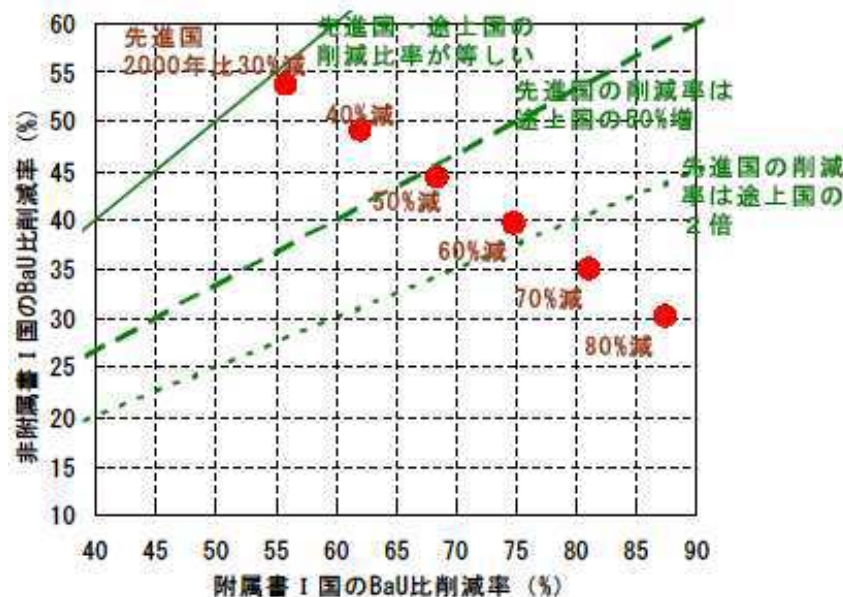
# 世界の排出量2050年半減の意味 -

世界の排出量2050年半減のためには、先進国は半減以上の削減が必要

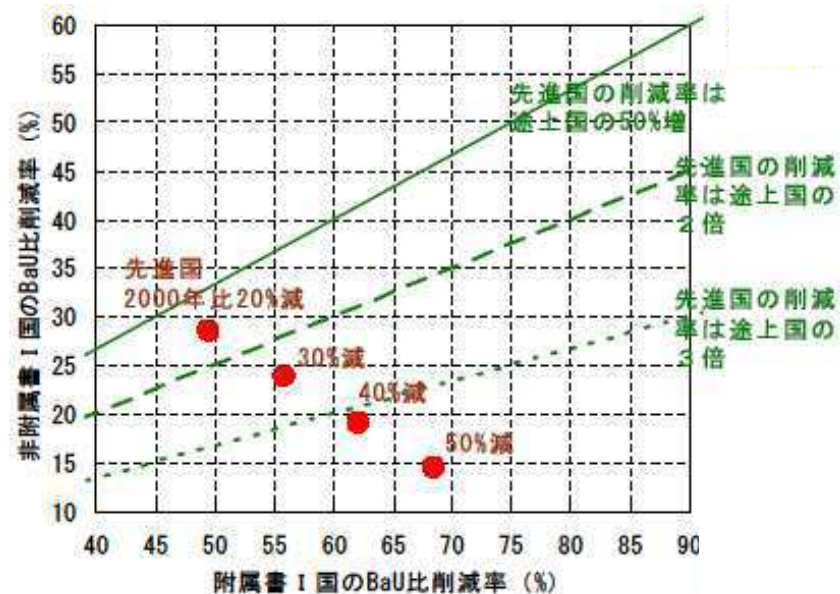
## 《IPCC第4次評価報告書における記述》

- 450-550ppm - CO<sub>2</sub>eq.のためには、先進国は2050年までに90年比で40-95%減、2020年までに10-40%減 が必要 (WG3 Technical Summary)
- 450ppmv - CO<sub>2</sub>eq.のための削減シナリオ例として、先進国は2050年までに90年比で80-95%減、2020年までに25-40%減 (WG3 Ch.13)

## 《RITE（（財）地球環境産業技術研究機構）の分析》



CO<sub>2</sub> 濃度450ppm 安定化に必要な削減率(出所:RITE資料)



CO<sub>2</sub> 濃度550ppm 安定化に必要な削減率(出所:RITE資料)

# さまざまな政策手段とその特徴に関する主な意見・評価

|                           | 趣旨・目的                                                                                                                                                                                       | 特徴・機能                                                                                                                                                                         | 問題点・導入に向けた課題                                                                                                                                  |
|---------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 排出権取引<br>(キャップ・アンド・トレード型) | <ul style="list-style-type: none"> <li>個々の主体に一定の炭素排出枠を定め、その排出枠を売買することを許可することで、温室効果ガスの総排出量を一定の上限以下に抑える方法</li> <li>炭素に価格をつけることにより、排出量削減にインセンティブを働かせることが狙い</li> </ul>                          | <ul style="list-style-type: none"> <li>目標達成の確実性がある</li> <li>対象部門全体で削減費用を最小化する</li> </ul>                                                                                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>排出量の初期配分の設定が困難である</li> <li>強度の規制的措置</li> <li>家庭部門の対策としては有効性を欠く</li> </ul>                              |
| カーボンリーケージを抑止する関税協定        | <ul style="list-style-type: none"> <li>自国と同等の対策を実施していない主要貿易相手国からの輸入品について、輸入者に関税を課す制度</li> <li>温暖化対策の緩い国に生産拠点を移転することなどによって生じるカーボンリーケージ(炭素漏洩)を防ぐ狙い</li> </ul>                                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>先進国から温暖化対策の緩い途上国への生産拠点の移転することで排出削減義務を逃れる行動を抑止する</li> <li>関税を課すことで、途上国に対しても温暖化対策を迫ることにつながる</li> </ul>                                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>WTOルールとの整合性について検討が必要</li> </ul>                                                                        |
| 国内炭素税<br>(環境税)            | <ul style="list-style-type: none"> <li>温室効果ガス排出に対して一定の課税をすることで、排出行為の抑制を目的とする税金</li> <li>特に、排出権取引等での排出抑制が難しい生活者の温室効果ガス排出削減の意識を高めることが狙い</li> </ul>                                            | <ul style="list-style-type: none"> <li>化石燃料削減や省エネ技術の研究開発等を促す(価格インセンティブ効果)</li> <li>国民ひとり一人が税の負担を感じることによる省エネ商品等の購入を促す(アナウンスメント効果)</li> <li>税収を温暖化対策の財源として活用(税収活用効果)</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>どの程度の炭素税率を用いればどの程度の排出抑制効果があるかを事前に把握することは困難</li> <li>税率をいったん定めると、変更する決定プロセスに時間がかかり、迅速な変更が難しい</li> </ul> |
| 資金メカニズム<br>(途上国支援)        | <ul style="list-style-type: none"> <li>気候安定化に貢献しようとする途上国を資金的に支援する方法</li> <li>途上国全体に温室効果ガスの排出削減に向けた取り組みへの参加を促す狙い</li> </ul>                                                                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>気候変動に脆弱な途上国の温暖化への適応支援を促す</li> <li>資金や技術が伴わない途上国に持続可能な温暖化対策を促す</li> </ul>                                                               | <ul style="list-style-type: none"> <li>民間資金の投入促進</li> <li>政府資金と民間資金の役割分担</li> </ul>                                                           |
| セクター別アプローチの活用             | <ul style="list-style-type: none"> <li>科学的かつ透明性の高い尺度としてエネルギー効率などをセクター別に割り出し、今後活用される技術を基礎として削減可能性を積み上げる方法(福田総理ダボス演説)</li> <li>国別総量目標の設定手法</li> <li>共通のルールに基づく目標設定を行うことで公平性を担保する狙い</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>産業活動の実態を反映した目標設定が可能である</li> <li>業種・製品分野毎の現実に即して取り組むため、排出削減の実現可能性が高い</li> </ul>                                                         | <ul style="list-style-type: none"> <li>気候安定化を実現する目標との整合性を取らなければならない</li> <li>各国は産業活動について正確な情報を把握しなければならない</li> </ul>                          |

# 各国の温室効果ガス排出量削減目標の動向

先進国では概ね60～80%の2050年削減目標を表明

## ● 各国の2050年削減目標

- 英国 : 1990年比60%削減 (気候変動関連法案審議中・80%削減も検討中)
- フランス : 1990年比75%削減 (エネルギー政策法[2005年7月])
- ドイツ : 1990年比80%削減 (長期エネルギー需給計画[2002年9月])

EUは1990年比世界全体で50%削減、先進国(EU含む)で60～80%削減について合意 (EU首脳会議[2007年3月])

- オーストラリア : 2000年比60%削減 (ラッド首相がCOP13にて宣言[2007年12月])
- カナダ : 2006年比60～70%削減 (ハーパー首相施政方針演説[2007年10月])
- 米国 : ヒラリー・オバマ両候補 1990年比80%削減  
: マケイン候補 1990年比60%削減 (マケイン・リーバーマン法案)  
: リーバーマン・ウォーナー法案 2005年比63%削減

## ● 各国の中間削減目標

- EU : 2020年1990年比20%削減 (EU首脳会議合意[2007年3月])
- 米国 : 2025年までに伸びをゼロにする (ブッシュ大統領が第3回MEMで表明)  
: リーバーマン・ウォーナー法案 2020年2005年比19%削減

# 「クールアース推進構想」(1月26日、ダボス会議)の概要

- ポスト京都フレームワーク

- 世界の温室効果ガス排出を今後10～20年にピークアウト、2050年までに少なくとも半減。国連にその方策の検討を要請。
- 温室効果ガス削減に向けて主要排出国とともに国別総量削減目標を掲げて取り組む。
- 目標の策定に当たっては、削減可能量を積み上げ、削減負担の公平さを確保する。

- 国際環境協力

- 世界全体で2020年までに30%のエネルギー効率を改善する目標を世界で共有。
- 100億ドル規模の新たな資金メカニズム(クールアース・パートナーシップ)を構築し、途上国の温暖化対策を支援する。

- イノベーション

- 革新技术の開発と低炭素社会への転換。
- 環境・エネルギー分野の研究開発投資を重視し、今後5年間で300億ドル程度の資金を投入する。

# TICAD (Tokyo International Conference on African Development) の概要

## 《趣旨・発足》

- TICADとは、アフリカ開発をテーマとする政策フォーラム。1993年以降、日本が主導し、国連、国連開発計画(UNDP)、世銀等と共催して開催。5年に1回の首脳級会議に加えて、閣僚級会議(これまで4回)等を開催。

## 《これまでの成果(2003年 TICAD 「TICAD10周年宣言」)》

### < 成果 >

- アフリカへの世界の関心喚起 / 「人間の安全保障」等哲学共有
- NEPAD(アフリカ自身によるアフリカ開発のためのイニシアティブ) 支援のコンセンサス形成
- パートナーシップの拡大、特にアジアとアフリカの関係強化についての認識深まる

### < 課題 >

- 衡平な国際貿易の創設は依然として主要課題

## 《TICAD (2008年5月に横浜で開催)》

### < 意義 >

- TICAD の成果を背景に、洞爺湖サミットでアフリカ開発に関する議論において指導力を発揮する。

### < テーマ >

- 成長の加速化、平和の定着、MDGs達成を含む「人間の安全保障の確立」、環境問題・気候変動問題への取組に国際社会の知識・ノウハウ及び資金を結集ーなどが具体的テーマ。

# ミレニアム開発目標（MDGs）の概要

## 《趣旨》

- ミレニアム開発目標（MDGs:Millennium Development Goals）とは、2000年に開催された国連ミレニアム・サミットで採択された「国連ミレニアム宣言」（平和と安全、開発と貧困、環境、人権とグッドガバナンス（良い統治）、アフリカの特別なニーズなどを課題とする）と1990年代に開催された主要な国際会議やサミット採択された国際開発目標を統合し、一つの共通の枠組みとしてまとめられた目標。

## 《2015年までに達成すべき8つの目標》

- 目標1：極度の貧困と飢餓の撲滅
- 目標2：初等教育の完全普及の達成
- 目標3：ジェンダー平等推進と女性の地位向上
- 目標4：乳幼児死亡率の削減
- 目標5：妊産婦の健康改善
- 目標6：HIV／エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延の防止
- 目標7：環境の持続可能性確保
- 目標8：開発のためのグローバルなパートナーシップの推進

達成が特に  
危ぶまれる目標

2008年秋に国連で中間レビューを実施（2008年は目標の折り返し年）